

# 個人・メディア・社会の関係性を紡ぐ

——「本づくりとメディア・リテラシー」プロジェクト

ペク・ソンス（神田外語大学外国語学部専任講師）

長谷川一（東京大学大学院学際情報学府博士課程）

## 1. 本プロジェクトのねらいと概要

メディア・リテラシーの意義と活動は今日、少しずつながらも確実に浸透しつつあるとあっていいだろう。だがそこで語られるメディア・リテラシーのほとんどは、テレビという特定のメディアを前提としたものであるという点にも注意が払われてよい。こうした現状については、メディア・リテラシーの起源と発展の歴史を顧みれば、一定の必然性があるといえるかもしれないが、だからといってこの事実は、けっしてメディア・リテラシーにおいてテレビだけが特権的な地位を占めることを意味しているわけではない。メディア・リテラシーという言葉をもっとも素直にとらえるのならば、それはさまざまなメディアのリテラシー、という意味でなければならないはずである(1)。

じじつ現代社会はきわめて複合的で入り組んだメディア環境のなかに存立している。現在のわたしたちの生活は、テレビと切っても切り離せないものであると同時に、それ以外のさまざまなメディアに接したり、それらを利用したりするなかで成立しているのだ。試しにいくつかあげてみれば、パソコン、インターネット、携帯電話、携帯音楽プレーヤ、本や雑誌、CD や DVD、郵便や宅配便、ノートやメモ帳、カメラ、固定電話、新聞……などといったぐあいに、枚挙にいとまがない。メディア・リテラシーの理論と実践には、本来的に、このような全体的な状況を包括的に取り扱い、理解できる枠組みの構築をめざしてすすめられていくことが要請されているといえよう(2)。

そのためのパイロット研究のひとつとして位置づけられるのが、本稿で報告する「本づくりとメディア・リテラシー」プロジェクトである。

このプロジェクトで中心となるメディアは「本」だ。インターネットや携帯電話が「新しいメディア」として語られるものの典型だとすれば、その対極にある本は「古

いメディア」の代表格ともいえる。本がそのように「古いメディア」であるということは、それがわたしたちにとって自明の存在となっていることを意味している。だからこそわたしたちはふつう、あらためて本について疑問をもったり、深く考えてみたりしようとはしない。だがそれでは、わたしたちはいったい本というメディアについて何を知っているというのだろうか？ おそらく、知っているつもりでいて、じつは何も知りもしないのだ。だからこそ、本について再び学び直すことが肝要であるに違いない。

そこで「本づくりとメディア・リテラシー」プロジェクトでは、本というメディアが何者なのか、そのことを学ぶことを目標に据えた。そしてそのために採用したのが、参加者ひとりひとりが、自分だけの本をつくるという方法である。「つくる」といっても、それは比喩的表現なのではない。文字どおり、一冊の本にかかわるすべての過程——企画し、執筆し、印刷し、製本し、そして実際に書店に持ち込んで販売する——を経験するのだ。こうした実践的活動をとおして、本というメディアをいったん異化したうえで再び学び直し、そしてメディアが他者にどのように開かれていくかということ学ぶのである。

メディアの諸過程を参加者がすべて経験するという実践を基盤にした本プロジェクトの思想を支える視点を、二つあげておきたい。

第一に、本とテキスト、あるいは形態という意味でのメディアと内容という意味でのコンテンツの分離を前提としないという見方である。一般的なメディア・リテラシーの方法として、たとえばテレビ番組や CM のようないわゆるコンテンツをテキストと見なし、それを読み解くということがある。いうまでもなく、テキスト分析自体はたいへん重要である。だがその一方で、メディア論的な観点からは、メディアとコンテンツの二分法によってメディアが論理的に目的合理性へ還元されてしまい、メディアを問う意味そのものが揮発しかねないことも指摘されるべきだろう。マクルーハンの警句が示唆するように、メディアとコンテンツは相互規定的な関係にある。メディアを学ぶさいに、わたしたちがこれまで以上に意識しなければならない点であるといえよう。

第二に、メディア理解の断片化を克服し、メディアを総合的かつ全体的に理解することの重要性である。今日の出版産業においては、生産・流通・受容といった諸過程は無数に分離分断されており、その個々の過程に割り当てられる形で、産業への従事者の仕事もまた分断されている。たとえば、出版社は企画・編集・販売などを担うが生産手段をもたず、書店は取次業者が送りつけてくる新刊書を店頭と並べて販売することしかできない構造になっている（これは他の多くのマスメディア産業についても同様だろう）。こうした分業体制は、本というメディアがどのようなシステムのなかで成立しているのか、その全体像を把握することを困難にする大きな要因となっている。つまり、一冊の本の企画・制作・販売のすべての過程について、ひとりの人間が

そのすべてに従事し知悉しうる状況にはないのである。他方で、こうした出版産業の周縁においておこなわれている「ミニコミ」とよばれるようなメディア活動では、作者が製本から販売までをおこなうのが通例だ。ただこれらは全般に趣味の領域に存立しており、他者との出会いや社会性という観点には必ずしも十分な意識を振り向けられているとはいえない。また、既存の製本ワークショップなどの活動は、伝統的な製本技術の会得であったり、アートブックとよばれるような美術作品としての制作ということが目的とされている。すなわち、オルタナティブなメディア活動という観点がすっぽり抜け落ちているのであり、だからこそこのプロジェクトのように、本にかかわる全過程を経験していく実践的なメディア・リテラシー活動に大きな意義を見出すことができるのである。

本プロジェクトは、第一期と第二期にわたって実施された(3)。前者の実施時期は2002年度(後期)、後者は2003年度(通年)である。場所はいずれも神田外語大学(千葉県千葉市)。以下に詳しく報告する。

## 2. 本づくり実践：2002年度

第一期の「本づくりとメディア・リテラシー」プロジェクトは2002年9月から2003年3月まで神田外語大学の「コミュニケーション演習」の授業で実施された。このプロジェクトには講師3名と学生10名が参加したが、講師は以下のメンバーである。

ペク・ソンス：神田外語大学国際コミュニケーション学科専任講師

内澤句子：イラストルポライター／碧鱗堂本づくりワークショップ主宰

長谷川一：編集者(東京大学出版会)／東京大学大学院学際情報学府博士課程



写真1 ワークショップの最初に内澤が用意した見本。さまざまな姿形をもつ本たち

このプロジェクトは計画された全体プログラムの中で、一部だけを切り取って実行した形になったが、それには二つの理由があった。最初の理由は実行計画が急に決まったことによって講師たちが事前に十分な議論や準備する時間がなかったことである。二つ目の理由は先行研究や先行実践がなかったので、授業の予測が出来ず、ほとんどのことが手探りの状態で前例を作っていく実験的な授業にならざるをえなか

った状況の中で、その核心である「物づくり」として「本の制作」をまず忠実に実行してみたかったことである。

プロジェクト授業は「本の制作」を中心に行われたが、その内容は4段階に分けて組み立てられていた。まずは学生たちに歴史的・デザイン的に多様な形の本を見せることによって、自ら持っていた「本」に対する認識を自覚させ、改めさせる（写真1）。第二に自分が制作する本の中身とデザインの企画を立てる。第三は中身づくりと材料の調達である。そして最後にすべてを集め、本の形に仕上げることであった（写真2～5）。学生たちはこの作業を9月から2003年の1月にかけて実行し、同年3月にメルプロジェクト主催のシンポジウムでその成果を発表することをもってこのプロジェクトを終了した。



写真2（左上）製本用プレス機に折丁を重ねて固定し、背にかがりのための切り込みを入れる



写真3（右上）専用の針と糸をつかい折丁をかがって綴じる



写真4（下）巻物はまず紙を軸にとめ、少しずつ貼りつないでいく



写真5 完成した「本」たち

全体として学生たちの本は中身を作ることよりも自分の感覚を表現することに費やされたように思われる。そのため、文書よりも写真やイラストが多く使われたし、中身の企画とその実行よりはデザインの企画や手作業に熱心であった。結果的にはほとんどの学生が「自分のための本」「手づくり作品としての本」を手にするようになった。このような結果は今回のプロジェクトが「本の制作」に集中していたことからして当然であり、学生たちに「もの」としての本を認識させた点では成功したといえる。しかしながら一方で「他者に開かれた本」を学生たちに意識させ、自覚化させていくにはどのような仕掛けやプログラムが必要になるかという問題が課題として残った。

### 3. 本づくり実践：2003 年度

第二期の「本づくりとメディア・リテラシー」プロジェクトは、第一期の実践で不足したところを補強し、新しく発見した視点を取り入れ、企画されたものである。つまり本を作る技術を学ぶだけではなく、またその「本の制作」過程を体験することによって「自分のための本」や「社会に開かれた本」を意識できるようになるだけではなく、自分たちがやっている作業の全過程とその産物をもつオルタナティブ・メディアとしての可能性や社会との関係性を認識するところまでを含んだものである。このプロジェクトはペク・ソンスが神田外語大学で担当する「コミュニケーション演習」時間を使い、授業形式で 2003 年 4 月から 2004 年 3 月までの間に行なわれた。授業目標は、「個人・メディア・社会」の関係を幅広い視点で分析的に見つめることである。つまりメディアの消費者である個人はどのようにメディアと接しているのか、メディアはどのような多様性と特性を持ち、その社会的な役割を果たし、どのように変化してきたのかなどを考えた上で、個人と社会との間において、表現媒体としてメディアの可能性を探り、理解することである。

授業は講師 4 名と学生 8 人で行なわれたが、講師として以下のメンバーが参加した。

ペク・ソンス：神田外語大学国際コミュニケーション学科専任講師

内澤句子：イラストライター／碧鱗堂本づくりワークショップ主宰

長谷川一：編集者（東京大学出版会）／東京大学大学院学際情報学府博士課程

大橋あかね：手づくり絵本作家

「本づくりとメディア・リテラシー」プロジェクト」授業は、学生たちが自らの本を制作することによって、メディア特性・メディア表現などについて学習するプログラムであった。授業は「企画→取材→編集→本の装丁→完成→発表→販売→評価」の手順で、一学年を通して行われた。前年度のプロジェクトと最も違うところは二つあ

った。まず先行プロジェクトが「本の制作」を中心に行なわれたのに対し、今回は講義やディスカッションの時間を十分取ったことであった。この時間を利用してメディア全般における一般的理論や比較論的視点、世界におけるメディア教育の現状や内容などを理解し、自分たちがやっている作業の社会的な意味を繰り返し自問し意識するようにしたことであり、そこで学び、感じたことを本づくり実践で具体化させていくようにしたのである。二つ目は一連の作業が終わった後、完成した本に社会的な可能性と価値を問わせたことである。学生たちは既存の一般書店をはじめ、どのような場所に自分の本が置かれ、人々の目にふれさせることが出来るかを探ることからはじめた。本の価格を設定し、古本屋、ミニコミ書店、デザイン・フェスティバルなどに本を出品し、売った。そしてその結果を持って、自分のアイデアや作品に対する広い意味での評価としたのである。

#### 4. 実践の成果と学生の反応

実践の最も著しい成果は手元に残った学生作品そのものである。それぞれの本には彼らが失敗したこと、学んだことが積み重ねられ、記録されている。学生たちの感想をもってこのプロジェクトの意味や成果を述べることにする。

1) 森下賢一 (2003 年度参加) 「・・・自分の作品を作り上げていくなかで、私はなぜ人間というものがあるのか、本に限らず絵を描いたり表現したがるのかということに触れたような気がしました。・・・人間は笑ったり表現したりします。何かそのあたりに私がプロジェクトを通して学んだことがあるような気がします。」 「本づくりにおける個人的な意義は『表現者になる喜び』とでも言えるかもしれません。・・・自分で小説を書き上げたということ、そのことに私は強い意義を感じます。この『楽しさ』というのと成し遂げたことの『達成感』を味わえることはメディア・リテラシーを学ぶその過程においてとても大せつな要素だと思います」

2) 会田まり (2003 年度参加) 「本を作ったことによってモノを作るということの様々な面をみることができたと思う。まず、どういうものを作りたいのかを考えると、自分自身について考えるということにつながると思う。・・・自分自身を見つめなおすことによって、どんな本を作りたいのかということが見えてきた。・・・構想の段階からどんなものを、なんのために、どういう人向けに作るのかを考えなければならないと思う。このようなことを考えることは社会を考えることだと思う」

3) 青木えみ (2002 年度、2003 年度参加) 「・・・一番最初にそこはこだわらなくても良いと教わったにも関わらず、全員四角い本を作ったのである。非常に面白いと

感じた。私が感じたのは、しっかり全員メディアの事、‘売れる本’ということのを頭に置いていたことである。」「個人的には締め切りという部分が一番自分にとって苦しかった。・・・責任の重さ。当初はやる気だった私も段々と締め切りが迫るにつれて自分の力の限界にせいにし、もともと出来るわけがないだの愚痴を言うようになり、しまいには逃げ出したくもなった。しかし、ここであきらめたら、これから先社会人になった時には、何も出来ず、自分の力のなさに泣きを見ると思い、苦しからうがなんだろうが、最後までやり続けた。その気持ちこそが意義だと感じ、そう思えたことがこの本づくりをやった異大きな意味だと言える」

4) 西館篤子 (2002 年度、2003 年度参加) 「・・・自分が作った本が果たして書店におけるものになるのか、手に取ってくれる人はいるのか不安が募っていくばかりでした。自分の意見がどれだけ世間に受け入れられるかがとても不安でした・・・」  
「タコシエで自分の本が一冊売れていたことを知り、とてもうれしく、感激しました。・・・本が一冊全く見ず知らずの人が自分のつけた価額で買い、その 3 割をタコシエに支払うというこの一連の流れを体験できてとてもよかったです」

## 5. まとめ

このプロジェクトの最終的な目標は「本を通して個人・メディア・社会の関係性を理解する」ことであつたが、学生たちがこのような内容をただ講義や文献を通してではなく、自分たちの手で直接制作したり、自分の足で売り歩いてみることを通して獲得していったことの意味と効果は計り知れないものである。このプロジェクトを通して学生たちは本づくりに必要な様々な技術を覚え、本に対する認識だけではなく、社会的システムの中でメディアを理解することができたと思われる。しかしそれに限らず、学生の感想文で述べられたように一連の作業におけるプレッシャーと達成感の中で個々人が多くのことを感じ取り、変化し、成長していったと思うのである。その意味でこのプロジェクトはメディア・リテラシー教育の研究における方法論や理論の構築などに関して多くの示唆を与えてくれるものであつただけではなく、学生たちにとって効果的な教育プログラムであつたと思われる。

しかしながら、二期にわたるプロジェクト実行を通して明確になった課題は、このようなプログラムの一般化、または応用の問題である。今回の実践で明らかになった有効的な方法論や問題設定を今回のプロジェクトのような特殊な条件の下だけではなく、より多様な状況の下で実行できるようにするにはどうすればいいかを問うことになる。そのためにも今回の過程における出来ごととその結果の分析と多様なシミュレーションが必要であると思われる。

注：

- (1) メディアリテラシー研究会（市川克美、音好宏、見城武秀、後藤繁榮、藤本浩、水越伸）『メディアリテラシー——メディアと市民をつなぐ回路』日本放送労働組合、1997年。
- (2) 長谷川一「メディア・リテラシーの拡がり」、東京大学情報学環メルプロジェクト・日本民間放送連盟編『メディア・リテラシーの工具箱』東京大学出版会、2005年（近刊）所収。
- (3) 本プロジェクトについては、第一期終了後に発表された次の論文においても報告されている。あわせて参照されたい。長谷川一「『本づくり』から『名刺パンフレット』まで——メディア・実践・存在論、あるいは可能的様態の発現について」、水越伸・吉見俊哉編『メディア・プラクティス——媒体を創って世界を変える』せりか書房、2003年、pp.52-69。